

とっても短いおはなし集

～怖いおはなし編～



eru

『薄い壁の向こうに』

最近、毎晩隣の部屋から物音が聞こえてくる
ずっと空き部屋だったから、静かだいいと思っていたのに。
誰か越してきたのだろう。壁が薄いから、多少の騒音は仕方がない
「・・・にしても、うるせえな」
俺は、壁に耳を当ててみた。ガタッガタッと何かが動く音が聞こえる
何やってるんだらう。声は聞こえない。一人なのか、それとも・・・

寝不足だが、学校に行かなければならない
「あ、大家さん」
初老の大家さんは、にこやかにあいさつしてくれた
「あの、俺の隣の部屋、どんな人ですか？」
大家さんはしばらく考えていた。眉間に皺が寄っている
「・・・あら？あなたの隣はずっと空き部屋のはずだけど・・・」

その日から、ますます眠れなくなって、それでも音は止まなかった
ネズミか猫でも住みついてしまったのかもしれない。そう思い込もうとした
「そんなわけ、ないよな・・・」
ふとんを頭からかぶった。友達の家泊めてもらえばよかった、と思いながら目を閉じた

今日こそは、奴の正体を暴いてやろうと決心を固めた
ベタにバットを持って、隣の部屋の前に立つ。とりあえず、チャイムを鳴らした
すると、がチャッとドアが開いた
俺は恐怖のあまり後ろに飛びずさって手摺に背中をぶつけた
「・・・はい？」
無精ひげを生やして、長い髪を垂らした男が眠そうな顔で、そう言った

俺は隣の部屋の不審な男の前で正座をしていた
「いや～バレちゃたか～悪いとは思ってたんだけどねえ」
こいつはすっげー明るく笑って、頭を掻いた
「鍵開いてたからさあ。ラッキーと思って」
大家さん、しっかりしようよ・・・。俺は人のいい笑顔を浮かべた大家さんを恨んだ
「チャイム鳴ったら、反射で出ちゃったよ。俺、ここに住んでるのバレないようにしてたのに」
はっはっは、と笑って俺の前にコップを置いた
「ごめんねー水道水しかなくて」
ぬるいんだらうなーと思いながら俺はコップを手取る
「君、通報する？」

「は？」

「それとも、大家さんに言う？」

「・・・はあ」

「やっぱ言っちゃおうよね？俺、もうここに居られないや・・・」

あまりにも残念そうに彼が言うから、俺は少しだけ同情し始めた

「家賃払えば、大家さんも怒らないと思いますけど」

「家賃いくら？」

「5万」

「無理！俺無職だもん！バイトはしてるけど」

そうっぽいなあ、と呆れた。でも、この人おもしろい

「夜、ガタガタしてるの、あれ何ですか？」

「え？俺、夜は工事現場で働いてるからここにはいないよ？朝、寝に帰ってくるけど・・・」

二人で顔を見合わせる

「・・・猫？」

「・・・ネズミかも」

また、眠れない日が続きそうだ

『運命の糸』

「もしもし？・・・もしもーし。あれ？おっかしーなー・・・」

ジュンは受話器を覗き込みながら首を傾げた

「ちゃんと説明書どおりに繋げたはずなんだけどなー。やっぱニセモノだったのかなあるけねえよな、“運命の人に繋がる電話”なんてよー」

しばらく説明書と受話器を交互に睨みつけながら待ってみたが、受話器の向こうは静寂を保ったままだ

「うわー騙されたーやっぱ通販なんてやるもんじゃねえな。1000円だから買ったけどよーこんなメルヘンチックな機械があつてたまわかってんだ」

ジュンは怒りを込めて機械を蹴った

「・・・き、きこ・・・たし、の・・・」

受話器からかすかに何か聞こえてきた

慌てて耳を当てるジュン。雑音交じりで聞き取りづらいが、どうやら女の声のようだ

「やった！繋がった！あの、俺、ジュンって言います。そちらは？」

「・・・えっと、は・・・ミホ、で・・・けど？」

「ミホさん、ね。俺は中3。あなたは？」

「・・・か、・・・た、誰？せつめ・・・て」

「聞き取りづらいなあ。電波悪いところにいるの？どこにいるか教えてよ会いに行くからさ」

ジュンはミホの顔を想像してにやけた。声はとりあえずかわいいか細くて綺麗な声だ

「じゃ・・・く、来て」

「く？何？」

「早く！！」

通信は途絶えてしまった

「早くって言ったって・・・どこにいるかわかんねーじゃん・・・居場所教えてから切れよーなんかもう繋がらないし。

うわー会いたかったなあ、運命の人。

いや、運命の人なんだから、そのうちどこかで会えるのか。

気長に待つか・・・」

何気なく、テレビをつける。夕方のニュースが流れていた

『たった今、入ってきた情報によりますと、行方不明になっていた波子田ミホさんが遺体となつて

発見された模様です。場所は○○山の中腹にある山小屋で・・・』

「ミホ・・・？」

ジュンはテレビに飛びつく

画面には制服姿のミホが映っていた

「いや、このミホなわけねえよなあ・・・」

『犯人は逃走した模様で、ミホさんの側には携帯電話が落ちていました』

ピピピピ・・・

電子音が鳴る。ジュンは慌てて振り向いた

先ほどまでミホと繋がっていた機械のランプが点滅している

「かかってきた・・・？」

恐る恐る手を伸ばす。一体誰から・・・？

『警察です。もしもし、あなた波子田ミホさんのお友達？』

背筋が凍る。なぜ、俺のところに・・・

『ミホさんの通話履歴の最後があなたの番号になっているんですよ』

「・・・！」

『・・・続いてのニュースです。詐欺の容疑で通信販売会社の社長他2名が逮捕されました

容疑者らは電話のような機械を、“運命の人に繋がる電話”と称して売り出していました

この機械は配線を繋ぐと自動的に適当な番号にかかるとなっているようです

他にも様々なでたらめな商品を買っていました。視聴者の皆さん、格安の商品にはくれぐれもご

注意くださいますよう・・・』

『鬼の目にも涙』

いだよ」

「・・・じゃあ、なんで私と付き合ってるの？何で私に人間を食べるようにすすめるの？私なんか死んでもいいんでしょ？シーヤのことばかり褒めて・・・シーヤと仲良くすればいいじゃん！私のことはほっといてよ！」

こういうことを言うと、イヤマは悲しいような、怒っているような表情をする勝手な男だ、とミレイは思う。自分は散々冷たい言葉を浴びせておいて、ミレイが少々きついことを言うと、少年のように泣きそうな顔をするのだ

「お前に・・・死んでほしくねえからだよ。お前がいなくなったら、俺はどうやって生きていけばいいんだよ！」

ほらやっぱり、自分のことばかり考えている

鬼は、自分で人間の体を手に入れなければならない。迷信のようなものだが、そうでないと効果がないと言われていた。だからミレイは自分で人間の住むところへ下りていった

「・・・無事に帰ってこいよ、ミレイ」

イヤマは谷を見下ろす。隣で傷だらけのシーヤが眠っている人間を襲ったときについた傷だ。人間を殺さずに体の一部だけを奪うには、相当の困難がつきまとう。手加減すれば、こちらが傷つく可能性が高まるでも、やっぱり殺すのはよくないと、みんななんとなくわかっているのだ鬼は、人よりも心がデリケートなのかもしれない

「帰ってきたら、今日ぐらいはミレイに優しくしてやれば？」

寝ていると思っていたシーヤが言った

「うっせ、お前に言われなくてもするっつーの」

イヤマはシーヤのわき腹を軽く蹴った

『緊急事態後の日常』

『緊急事態後の日常』

今、俺の後ろでなんだかとっても嫌な話し合いが行われているんですけど。
ここは深夜のファミレス。客はまばらだがそれなりに賑やかだ
俺の待ち合わせ相手はまだ来ない。背中合わせで俺の後ろに座っているのは、
かなりガラの悪い男二人組。タバコをくゆらせ、下卑た笑いを交えながら話している

「いいか、今日の8時までに完了してなきゃ、俺たち消されちまうんだからな」
「わかってるよ。任せろって。8時以降にあいつが生きてるってことはあり得ないから」
「頼むぜ。あの距離から狙えるの、お前だけなんだから」

絶対、絶対やばい相談だ。きっと、ビルの屋上から向かいのビルの部屋にいる
要人を撃つ気なんだ。やばい。8時までに人が1人死んでしまう・・・
あいつら、俺が子供だからって声をひそめる必要を感じていないらしい
どうしよう、警察に通報したほうがいいだろうか
あ、でも中学生なのに深夜にファミレスいたら補導されるかも。
やばいなー。どうしたらあいつらの計画を邪魔することができるんだろう

「悪い、待たせた」
友人がやってきた。後ろの席の2人組は数分前にレストランを出て行った
「なあ、相談なんだけど」
俺は友人に経緯を話した
「マジかよ？だったら警察に任せたほうがいいな
交番行くか。補導されるかもしれないけど、命には代えられないだろ」
友人の言葉に納得し、俺たちはレストランを出た

「おい」
後ろから低い声で呼び止められた。それはさきほど俺の背後で聞こえていた声にそっくりで。
凍りついた俺の顔を見て友人は、俺の手を引いてダッシュした
「おい、待て！」
追いかけてくるのは男一人だった。俺たちは必死に逃げた。交番まであと数十メートル・・・
「あっ！！」
俺の腕は男に捕まった
「お前、俺たちの話聞いてただろう。殺しはしないから、警察に知らせるのあと3時間待て」
「は、離せよ！」

俺は声が出なかったから、友人が言った

「仲間がもう準備してるところだ。やっちまえばこっちのもんだ

だが、やる前に邪魔されるとまずい。頼むから、黙ってろ」

俺の腕は折れそうなほど強く捕まれていた

「ユウジ！逃げろ！」

俺はそう言った。ユウジは男に腕をつかまれていないから、俺の手を離せば逃げられる

「でも・・・っ」

ユウジは困惑して、しばらく迷ったが、俺の手を離して、逃げた

「やべっおい待て！」

男は俺を置いてユウジを追った。取り残された俺は、人通りの少ない路上で、呆然と立ち尽くした

とあるビルの屋上

明け方の冷たい風が吹きつけ、男の構える銃の照準はなかなか定まらない

「くそっ・・・」

向かいのホテルで寝ている標的の人物は、こちらが狙っていることに全く気づいていない

「早く始末しなきゃなんねえのに・・・」

男は独り言を呟くと、スコープを覗き込んで、再び照準を合わせようとした

そのとき、屋上の扉が開いた

「警察だ！」

「間に合ったようだ。君たちのおかげで人命救助ができた。ありがとう」

交番の警官が俺たちに笑顔で伝えてくれた

俺たちは互いに顔を見合わせてにんまりした

「でも、夜中に街をうろつくのはやめなさい。今回も、危ないことに巻き込まれるところだったんだから」

「はい」

俺らは優等生のように良い返事をして、家路に着いた

「いやーユウジに見捨てられたかと思って焦ったよ」

「ばか、見捨てたんじゃなくて、早く警察に知らせてお前を助けてもらおうと思ったんだよ」

「機転が利くなーお前は。疑って悪かったよ」

「お前の手を離すか、このまま道連れになるか、5秒考えちまったよ」

「ちょっ、なんだよー！やっぱ逃げようとしてたのかよ！」

「5秒だけ、裏切り者だな」

ユウジはにやっと笑って「じゃあな」と言った

寝不足だし、朝帰りで親に怒られるし、疲れてるし、でも今日は学校だし、またユウジと会うし・・・

そういえば、レストランで何を話そうとしてたんだっけ

「あっ宿題！」

俺の苦手な数学の宿題を、頭のいいユウジに教えてもらう、もとい写させてもらう予定だったのだ

「しまったー・・・」

今日はいいことなさそう。いいことしたのに。

白々と夜が明け始め、いつもの朝がやってくる。どーせ結局、いつもの日常だ

今、俺の後ろでなんだかとっても嫌な話し合いが行われているんですけど。

ここは深夜のファミレス。客はまばらだがそれなりに賑やかだ

俺の待ち合わせ相手はまだ来ない。背中合わせで俺の後ろに座っているのは、

かなりガラの悪い男二人組。タバコをくゆらせ、下卑た笑いを交えながら話している

「いいか、今日の8時までに完了してなきゃ、俺たち消されちまうんだからな」

「わかってるよ。任せろって。8時以降にあいつが生きてるってことはあり得ないから」

「頼むぜ。あの距離から狙えるの、お前だけなんだから」

絶対、絶対やばい相談だ。きっと、ビルの屋上から向かいのビルの部屋にいる

要人を撃つ気なんだ。やばい。8時までに人が1人死んでしまう・・・

あいつら、俺が子供だからって声をひそめる必要を感じていないらしい

どうしよう、警察に通報したほうがいだろうか

あ、でも中学生なのに深夜にファミレスいたら補導されるかも。

やばいなー。どうしたらあいつらの計画を邪魔することができるんだろう

「悪い、待たせた」

友人がやってきた。後ろの席の2人組は数分前にレストランを出て行った

「なあ、相談なんだけど」

俺は友人に経緯を話した

「マジかよ？だったら警察に任せたほうがいいな

交番行くか。補導されるかもしれないけど、命には代えられないだろ」

友人の言葉に納得し、俺たちはレストランを出た

「おい」

後ろから低い声で呼び止められた。それはさきほど俺の背後で聞こえていた声にそっくりで。

凍りついた俺の顔を見て友人は、俺の手を引いてダッシュした

「おい、待て！」

追いかけてくるのは男一人だった。俺たちは必死に逃げた。交番まであと数十メートル・・・

「あっ！！」

俺の腕は男に捕まった

「お前、俺たちの話聞いてただろう。殺しはしないから、警察に知らせるのあと3時間待て」

「は、離せよ！」

俺は声が出なかったから、友人が言った

「仲間がもう準備してるところだ。やっちまえばこっちのmond

だが、やる前に邪魔されるとまずい。頼むから、黙ってろ」

俺の腕は折れそうなほど強く捕まれていた

「ユウジ！逃げろ！」

俺はそう言った。ユウジは男に腕をつかまれていないから、俺の手を離せば逃げられる

「でも・・・っ」

ユウジは困惑して、しばらく迷ったが、俺の手を離して、逃げた

「やべっおい待て！」

男は俺を置いてユウジを追った。取り残された俺は、人通りの少ない路上で、呆然と立ち尽くした

とあるビルの屋上

明け方の冷たい風が吹きつけ、男の構える銃の照準はなかなか定まらない

「くそっ・・・」

向かいのホテルで寝ている標的の人物は、こちらが狙っていることに全く気づいていない

「早く始末しなきゃなんねえのに・・・」

男は独り言を呟くと、スコープを覗き込んで、再び照準を合わせようとした

そのとき、屋上の扉が開いた

「警察だ！」

「間に合ったようだ。君たちのおかげで人命救助ができた。ありがとう」

交番の警官が俺たちに笑顔で伝えてくれた

俺たちは互いに顔を見合わせてにんまりした

「でも、夜中に街をうろつくのはやめなさい。今回も、危ないことに巻き込まれるところだったんだから」

「はい」

俺らは優等生のように良い返事をして、家路に着いた

「いやーユウジに見捨てられたかと思って焦ったよ」

「ばか、見捨てたんじゃなくて、早く警察に知らせてお前を助けてもらおうと思ったんだよ」

「機転が利くなーお前は。疑って悪かったよ」

「お前の手を離すか、このまま道連れになるか、5秒考えちまったよ」

「ちょっ、なんだよー！やっぱ逃げようとしてたのかよ！」

「5秒だけ、裏切り者だな」

ユウジはにやっと笑って「じゃあな」と言った

寝不足だし、朝帰りで親に怒られるし、疲れてるし、でも今日は学校だし、またユウジと会

うし・・・

そういえば、レストランで何を話そうとしてたんだっけ

「あっ宿題！」

俺の苦手な数学の宿題を、頭のいいユウジに教えてもらう、もとい写させてもらう予定だったのだ

「しまったー・・・」

今日はいいことなさそうだ。いいことしたのに。

白々と夜が明け始め、いつもの朝がやってくる。どーせ結局、いつもの日常だ

『殺人事件』

「まあ、これでも飲んで落ち着きなさい」

その背の高い紳士はデスクから立ち上がって、完全に気が動転している婦人にブレンダーを注いでやった

「すみません」

婦人はグラスを受け取るとそれをぐっと飲み干した。茶色い液体が婦人の白い喉元を通り過ぎると、彼女の青ざめていた顔に赤みが差してきた

「では、順を追って説明願えますか」

紳士はデスクに戻り、深く回転椅子に腰掛けると、デスクに肘をつき手を組んで促した。少女の面影をまだ残している婦人は膝の上の両手に目を落としてぽつりぽつりと話し始めた

午後10時。雨上がりの歩道は街灯に照らされて黒く光っていた。暗い夜道を急いでいた婦人は四つ角で男とぶつかった。男の顔面と衣服は地で赤く染まっていた。街灯に照らされて一瞬見えた犯人の顔は、恐ろしく、この世のものではないようだった、と婦人は語った。紳士はその四つ角の詳しい場所と、血まみれの男が走り去った方向を聞くと、婦人に尋ねた

「なぜ、警察ではなく私のところへ来たのですか」

本来、婦人が「殺人犯を見た」とこの部屋に飛び込んできた瞬間に、しなければならなかった質問である。しかし、彼はしなかった。何か事情があるのだろう、と考えたからだ

「実は、その男というのが・・・」

婦人は震えていた。手に力がこもる

一瞬で男の顔を判別し、かつ深く印象に残ったのは、その男が彼女の知り合いだったからだ。いや、知り合いというにはあまりにも身近すぎる。男は彼女の夫の弟だった。つまり、義弟である

「夫と義弟は不仲でした。義弟はいつもお金に困っていて、夫に借金の相談をしに来ていました。夫は最初のうちはお金を貸していましたが、あまりにも毎回のことなので義弟のためにもならないと思い、貸さないようになりました。でも義弟が頼れるのは夫だけなのでその後も何度も貸してくれるように頼んできました」

口論になることも度々あったという。温厚な兄と、直情型の弟。大抵兄のほう折れて、弟に金を貸すことになった。しかし、兄夫婦の家も裕福なわけではなく、お金が底をついてきてしまった

「もう貸さない、と言うと義弟はかなり立腹していましたが、何とか宥めて帰ってもらったんです」

その後しばらくは何の音沙汰もなかったと言う。しかし今夜、夫の帰りが遅いのを気にした婦人が仕事場へと電話をかけると夫はもう帰宅したと言う。心配になった婦人は夫を迎えに行き、そこで義弟とぶつかったのだ

「ご主人はみつかったんですか？」

紳士は優しい声音で尋ねた。婦人は首を振った

「殺されてしまったのだと思いました。彼を探す勇気が私にはありませんでした。誰かに助けて欲しくて、こちらに伺ったんです。警察に行かなかったのは、もしかしたら、その・・・」

「弟さんが、殺人犯になるのが嫌なのですね？」

紳士が後を引き取って言った

「そうなんです。間違いかもしれないから。私の見間違えかもしれないし、それに、いくら不仲といっても、兄を殺すなんて・・・」

聞けば、婦人と夫と弟は3人で仲がよかったという。弟の金遣いが荒くなってから、次第に仲がこじれていったのだ

「本当は、彼がいい人だって知っているから。何かの間違いだって思いたいんです」

婦人は涙を流しながら言った。その小さな体を、紳士はいたたまれない気持ちで見ている

今から2時間前、一人の男が紳士を訪ねてきた。彼はひどく取り乱しており、紳士はブランドーを勧めてから話を聞いた

「実は、兄を刺してしまったんです」

男は兄と口論になり、持っていたサバイバルナイフで兄の腹を刺し、しばらくそこに呆然と立ち尽くした。警察に行くのはためらわれた。捕まるわけには行かない。迷った挙句、ここを訪れたのだと言う。彼は泣きそうに顔を歪めて「兄には妻がいるんです。俺は彼女を一人にしてみました。お願いします。彼女を守ってください・・・」

紳士は「あなたを秘書として雇いましょう」と婦人に向かって言った

「え？」

婦人はあまりにも唐突なその言葉に耳を疑った

「弟さんに、頼まれたんです。あなたの生活を保障してほしいと」

「どういうことですか？」

「さっきまで、ここにいたんですよ。彼が」

「えっ・・・」

「警察に送り届けてきました。彼が、あなたの夫を殺したのです。死体は近くの路上で発見されました」

「そんな・・・」

「弟さんは、あなたのことをひどく心配していましたよ。それで私は、あなたを雇おうと言うのです。この街では女性が金を稼ぐのは難しいですからね。どうですか」

婦人は紳士の前で働き始めた。義弟は逮捕され、終身刑になった。婦人は涙に明け暮れたが、紳士の心遣いで次第に癒されていった

紳士は探偵である。彼の元に相談に来る人は多い。探偵と言う肩書きを持ちつつも、街の相談役

を買って出ているのだ。彼は今日も悩める人にブランデーを勧め、相談者の話に静かに耳を傾けるのだ

『人斬鬼』

その男は、丘の上で独り、星空の下に浮かび上がる町を見下ろしていた
彼の一つにまとめられた砂まみれの髪を、冷たい風が撫ぜていく
男は着流しの乱れを直すと、傍らに置いてあった刀を取り上げて腰に差した

「丘の上に大量の死体が転がっていたそうだ。浪人同士の斬りあいでもあったんだろう」

「怖いねえ。最近は何騒いで」

「ああ、夜中は出歩かないほうがいいな」

町人の噂話がそこそこで囁かれていた。おびえる町人たちをかいくぐるようにして、大きな体の男がふらふらと歩いていく。そして、蕎麦屋の前にたどり着くと、ばたりと倒れこんでしまった蕎麦屋の主人はその男を店の中に引きずり込んでなんとか椅子に座らせると、蕎麦を食べさせた空腹を満たされた男は主人に頭を下げるとなけなしの金を台に置いた

「少し足りないが、まあいいよ。もう倒れないようにな」

主人は気前よく言って男を送り出した

「恩に着る」

男は暖簾をくぐる時、「次に来たときに今回の分も必ず払う」と言った

それからしばらく経って、物騒な事件も収まりかけた頃、蕎麦屋の前にこの前の大男が姿を現した

「おまえ、いったいどうしたんだ・・・その格好は」

男は着流しを血に染め、息荒く、立つのも必死のようだった

「蕎麦代。これで足りるか？」

男は懐からずっしりとした包みを取り出して主人に手渡すと、この間のようにバタリと倒れてしまった

しかし、今度は二度と立ち上がることはなかった

男は浪人を相手にした人斬りだったらしい。その強さは鬼神の如く、と後に伝えられた蕎麦屋に渡した金は人斬りで稼いだ金だった

主人はもちろんそんなことは知らず、男の誠意に感動し、その金で店を拡大した

男のおかげで減っていた浪士は男の死によってまた増え始めた

そこで町人たちはまことしやかにこう語るのだ

「丘の上に大量の死体が転がっていたそうだ。なんでも、私たち町人を守るためにものすごく強い鬼が戦ってくれているらしい」

「ありがたい話だな」

こうして男は伝説の中で町人たちを守り続けたのだった

『夢』

ありえない、ありえない、ありえない・・・
私は先ほどから同じ言葉ばかりを呟いている
耳を塞いで、でも目を閉じられずに見開いたまま、ガタガタと震えている
目の前にあるモノから目を逸らすことができない
できるはずもないのだ、なぜなら、目の前には、

私の、首が、転がっているのだから

「目の前の現実を受け入れなければ、前には進めないのだ」
その首が、そういったような気がした

目が覚めると、私の頬は涙で濡れていた。なんだ、夢か。そう思って目を上げると、
そこには首のない私が震えていた

『危機管理機能』

差し迫った危険を回避するとき、人はどういった行動を取るだろう。そして俺は一体、どうすればいいのだろう。

目が覚めたら見知らぬ部屋にいた。コンクリート固めの無機質な部屋で、窓はない。2メートルほど先に拳銃が落ちていて、そのさらに2メートル先には男が一人座ったまま気を失っていた

ここはどこだろう、とか、怖い、とか、色々な言葉が頭を掠めていったが、僕は本能的に拳銃に手を伸ばした。そのとき、気絶していた男と目が合った。彼は事態を飲み込もうと必死らしく、僕の手を凝視していた。僕はそんなこともお構いなしに拳銃を手を取った

向こう側にいる男は目を見開いて僕の行動を見ていた。そして、事態は最悪だと悟ったらしい

「あなたは誰ですか？ どうしてこんなところにいるのですか？」

僕はなるべく落ち着いた声できいてみた

「・・・俺は小堀。どうしてここにいるかは知らない」

男は自分のほうが不利だと知ってか、素直に返事をした

「僕もなんで自分がここにいるかわからない。何か知らないか？」

小堀は首を横に振った。一体僕たちは何の目的でここに連れてこられたのだろう。僕は確か今日、いつも通り学校に行ったはずだ。ああ、そうだ、そういえば通学途中に後ろからいきなり襲われた気がする。そして急に眠くなって・・・気づいたらここにいたのだ

「どうやら僕たちは同じ境遇らしいね。ただ、一つだけ大きな違いがある。何だと思う？」

「それ、だろ」

小堀は僕の持っている拳銃から目を離さない

「正解。僕はこれで、もしあそこのドアから僕たちをさらった犯人が入ってきたとしても自分の身を守ることが出来るかもしれない」

「でも、なんでここに拳銃があるんだ？ 犯人の狙いはなんだろう」

確かにそうだ。普通人質に武器など渡さない。では、一体なぜ・・・？

「おめでとう」

突然頭上から声が降ってきた

「拳銃を手をしているのは佐々木くん、君だね。先に目を覚ました君にご褒美をあげよう。2つの選択肢だ。そこにあるドアからは一人しか出られない。それを君たちのうちどちらにするかは二人で決めてもらおう。話し合いで決めてもいいし、その拳銃で一人に絞ってもいい。決定権は佐々木君にあるよ」

よくわからないが、犯人は僕たち二人のうちどちらか一人だけを外に出してくれるらしい

「外に出ないと一生この部屋で暮らすことになるよ」

犯人が言った

「お前、外に出ろよ。俺はこの部屋に残って脱出のチャンスを待つから」

小堀が言った

「無理やり拳銃で殺されるのは嫌だからな」

僕は迷った。もちろん僕は外に出たいし、人は殺したくないから彼の申し出は僕にとって一番いいことのはずだ。だけど、彼を残して出て行っていいのか。そして、外に出たとき、僕は何をされるのか・・・

「早く決めなさい」

犯人は僕を急かし、男は早く出る、と言う

「わかった。僕が外に出る。ごめんなさい」

僕は小堀に背を向け、ドアノブに手をかけた

その瞬間、小堀が僕に向かって突進してきた

小堀は僕の拳銃を奪おうとした。僕は彼の胸に拳銃を突きつけた

「やっぱり、自分のほうが大事ですか」

「・・・ばれたか」

「しょうがない、残念だけど」

佐々木少年は悲しそうな笑みを浮かべて引き金に手をかけた。俺はどうにかして拳銃を奪えないかと思案したが、もう無理なことはわかっていた。まさかこんな急に人生を終えることになるとは思っていなかった。だがしかたない。まだこの先長い、佐々木に生を譲ろう

室内にパン、と乾いた音が響いた。佐々木の足元に倒れる小堀。その死体を一瞥を与えてから佐々木は再びドアノブに手をかけた

「!？」

ドアが開かない。少年はガチャガチャとノブをひねる

「あれ？ドアが開きませんよ？もう僕一人しかいないのだから、鍵を開けてください」

少年はドアを叩きながら言った

すると犯人の声がドアのすぐ向こうで聞こえた

「佐々木くん、悪いが君を部屋から出す気は最初からなかった。その部屋で一生暮らしてくれたまえ」

「どうして？約束が違うじゃないか！出してくれよ！せっかく一人になったのに！」

佐々木は叫んだが返事は返ってこなかった

部屋の中には佐々木と小堀の死体だけが残った

佐々木の手にはまだ黒々と輝く拳銃が握られており、何の役にも立たないそれを、佐々木は部屋の隅へ投げ捨てた。夥しい血の海が広がっていた。真っ赤に染まった部屋で、佐々木は涙を流した

『シュベルツ酒場での一幕』

夕方5時。薄明かりの中で丸テーブルを囲んで4人の男がゲームに興じている
この地方特有のルールで行われるこのゲームは“あるもの”を賭けの対象としている

「おい、次はお前だぞ、ハイデン」

なかなかカードを引かないハイデンに痺れを切らしたオスカが言った

「ちょっと待ってくれよ・・・迷ってんだから」

「なに、たかがゲームだろ？そんなに慎重にならなくても・・・」

ずる賢い顔をしたメッシがあざ笑うように言った

「慎重にもなるさ。“あれ”がかかってんだから」

このゲームはババ抜きのように時計回りに隣の人の手持ちカードを引いていく

同じ数字がそろったら捨てていき、最後までカードの残った人の負けとなる

しかし、ババ抜きと違って、このゲームではババを使わない

そのかわり、エースが一枚しかない。そう、ハートのエースがババの役割をするのだ

酒場は4人のほかに数名の客がいた。彼らはそれぞれ世間話をしたり酒を飲んだりしている

店の主人はグラスを拭きながらランプとにらめっこをしている4人を見るともなしに眺めていた

「残り少なくなってきたな・・・」

ハイデンが心細そうにつぶやいた

「おいおい、びびってんのか？」

メッシは余裕の表情でカードを引く

「お前はこういうゲームに向いてねえな。すぐ顔に出るから・・・」

そういったものの、メッシの顔からも次第に笑みが消えていった

「上がりだ」

それまで黙っていたシュタイナーが静かに言った

「俺もだ」

オスカはふーと息を吐いて「マスターおかわり」とグラスを持ち上げた

「くそっ・・・どっちだ」

ハイデンはメッシの手にある2枚のカードを凝視し、震える手をテーブル越しに伸ばした

メッシとハイデンの呼吸は荒く、テーブルの上のランプの炎がゆれた

「こっちだ！」

ハイデンは意を決してメッシの手から右側のカードを引いた

「やった！」

ハイデンの手にはダイヤとクローバーの4が2枚そろっていた

「ハートのエースはどこだ？」

オスカが言う

「ハートのエースならここにあるじゃないか」

シュタイナーはナイフをメッシの左胸に突き刺し、心臓をえぐり出した

「・・・ああ、やっぱりこんなゲームするもんじゃないなあ」

ハイデンはほっと息をついてグラスをあおった